

# 東亜同文書院・東亜同文会刊行雑誌記事データベース

## 収録文献解題

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

石田卓生

---

### 東亜時論

第1号～第10号、第12号～第26号

東京：東亜同文会

1898（明治31）年12月～1899（明治32）年12月

東亜同文会機関誌。

1892（明治25）年4月、近衛篤磨が主宰する精神社（後に時論社と改称）の機関誌『精神』（後に『明治評論』、『中外時論』、『時論』と改題）として創刊される。1898（明治31）年6月、近衛が東アジア問題に取り組む同文会を結成すると、その機関誌とされた。同年11月、同文会が東亜会と合流し、東亜同文会が組織されると、同文会機関誌『時論』を『東亜時論』と改め、東亜同文会機関誌として月二回発行された。

誌面は、「論説」欄、同会関係者による現地からの報告である「通信」欄、ビジネス・ニュースを扱う「通商貿易」欄、アジアに限らず欧米諸国のニュースも収録する「外電日録」欄、同会の活動報告である「会報」欄などで構成されている。

---

### 東亜同文会報告

第5回～第8回、第10回～第132回

東京：東亜同文会調査編纂部

1900（明治33）年4月～1910（明治43）年6月

東亜同文会機関誌。

『東亜時論』にかわって東亜同文会の機関誌として発行された。第122回～第131回の月2回発行以外は月刊。

誌面は『東亜時論』を拡充したものとなっており、国内外の有力新聞雑誌の中国に関する記事を紹介する「時報」欄、中国の政治経済方面の重要ニュースをとりあげる「支那半月政治経済志」欄、さらに中国貿易に関する「統計」欄などが設けられ、清朝末期の中国を知る貴重な資料となっている。

『東亜時論』の廃刊をうけて発行されたものであることから、1900（明治33）年末から1901（明治34）年初にかけて創刊されたとおもわれる。

---

## 東亜同文書院学友会『会報』

第1号～第9号

上海：東亜同文書院学友会

1904（明治37）年2月～1909（明治42）年6月

東亜同文書院学友会機関誌。

東亜同文書院学友会は、学生間の親睦をはかるため、学生有志によって1902（明治35）年末ごろに結成され、翌1903（明治36）年に会則を定めて成立した組織である。

本誌の内容について世良一二（第2期生）は、「年一回の発行、書院の記事は勿論在清先覚者の御高説を承つて之を披露したり研究資料を発表し又当時の大清帝国内地遊歴各班の記事等を載せて読物として居たように覚へて居る。」（『滬友学報』第2号、1940年5月、38頁）と述べている。

この「大清帝国内地遊歴各班」は、所謂「大旅行」のことである。東亜同文書院では、1907（明治40）年から学生のみで中国調査旅行を行う「大旅行」が本格的に実施され、学生はその調査結果にもとづいて「支那調査報告書」や「大旅行誌」を作成した。

前者「支那調査報告書」は、卒業論文にあたる詳細な報告書で、愛知大学霞山文庫所蔵本（1916年～1919年、1921年～1935年分原本）ならびにそのマイクロフィルム版（愛知大学図書館編『支那調査報告書（マイクロフィルム版）』雄松堂書店、1997年3月）によってその大部分が伝えられており、その一部は外務省外交資料館、台湾国立中央図書館台湾分館台湾学研究中心ならびにそのマイクロフィルム版（国立中央図書館台湾分館委託員工消費合作社）によって伝えられている。

後者「大旅行誌」（愛知大学『オンデマンド版東亜同文書院大旅行誌（全33巻）』雄松堂書店、2006年）などは、学生が「大旅行」での個人的な感想や思いを記したもので、日誌形式もあればエッセイ、紀行文風のものもある記念文集である。

本誌には「大旅行」第1回（1907年）、第2回（1908年）についての「大旅行誌」が収録されている。

なお、本誌データ入力に際しては、財団法人東洋文庫の所蔵本を用いた。

---

## 支那経済報告書

第1号～第51号

東京：東亜同文会支那経済調査部

1908（明治41）年5月～1910（明治43）年6月

中国専門経済誌。

1907（明治40）年11月、東亜同文会は、日本の企業や実業家の中国市場進出支援を目的とした支那経済調査部を設立する。その加入者へ向けて月2回発行されたのが本誌である。

中国の経済動向に焦点をしばった編集がなされているものの、誌面は並行して刊行されていた東亜同文会機関誌『東亜同文会報告』を踏襲したものとなっている。また、『東亜同文会報告』第130回（1910〔明治43〕年）掲載の「招商局第三十六期営業報告」には、「三十五期報告八〔支那〕経済調査報告書第二十六号ニ詳ナリ就キテ参照スベシ」と、両誌揃って購読することが前提とされているかのような記述がみられるように、本誌と『東亜同文会報告』はいわば兄弟誌といえる関係にある。

---

## 東亜同文会支那調査報告書

第1巻第1号～第2巻第24号

東京：東亜同文会調査編集部

1910（明治43）年7月～1911（明治44）年12月

東亜同文会機関誌。

1910（明治43）年6月、東亜同文会機関誌『東亜同文会報告』と同会支那経済調査部発行中国専門経済誌『支那経済報告書』がともに廃刊され、同年7月から本誌が東亜同文会機関誌として発行された。第1巻第1～3号のみ月3回発行されたが、その後は毎月2回発行している。

---

## 支那

第3巻第1号～第36巻第1号

東京：東亜同文会調査編集部

1912（明治45）年1月～1945（昭和20）年1月

東亜同文会機関誌。

『東亜同文会支那調査報告書』の後継誌として巻号数を引き継ぎ、日本の敗戦まで発行された。第10巻第18号（1919〔大正8〕年9月）以前は月2回発行、後に月刊。なお、第10巻第22～24号、第14巻第12号、第18巻第12号は発行されておらず、第25巻第2号、同第3号は合併号である。

東亜同文会の機関誌であるが、中国に関連する政治、経済方面を中心としたさまざまな論説、記事を収録しており、たんなる会誌というよりも総合雑誌的な内容となっている。実際、財団法人東亜同文会『自昭和二年十月至昭和三年三月事業報告』（1928年）によれば、当時の発行部数は1,500部（内訳：直接購買者469、商店委託429、起稿家及関係先配布424、広告募集用100、納本其他10、残部68）とあり、一部は一般へ向けても販売されていた。

---

## 滬友

第1号～第13号、第15号～第29号

上海：滬友同窓会

1917（大正6）年6月～1926（大正15）年2月

滬友同窓会々報。

滬友同窓会は、東亜同文書院の同窓会である。会名の「滬」は、上海の別称。

東亜同文書院徐家匯虹橋路校舍完成（1917年）と同時に校内におかれた滬友同窓会本部から発行された。年に2～4回刊行されているが、愛知大学霞山文庫ならびに東亜同文書院大学記念センターには第29号（1926年2月）まででしか伝えられておらず、終刊時期は不明である。世良一二（第2期生）が、『滬友』は「更に新聞体のもとで代り杜きれ杜断れに吾々を訪ねて呉れて居たが何日の間にやら中絶してしまつた」（『滬友学報』第2号、1940年5月、38頁）と述べていることから、昭和期に入ってから発行が中断したものとおもわれる。

---

## 支那研究

第1巻第1号～第23巻第2号通巻第62号

臨時号研究旅行報告輯第1輯～第3輯

上海：東亜同文書院支那研究部、後に東亜同文書院大学東亜研究部

1920（大正9）年8月～1942（昭和17）5月

学術雑誌。

1918（大正7）年10月、東亜同文書院は中国を対象とした研究機関支那研究部を学内に開設した。その研究成果を発表するために刊行されたのが本誌である。年によって発行回数はことなるものの、創刊から『東亜研究』と改名するまで毎年刊行されつづけた。非売品とされた時期（1920年8月～1928年1月、  
1930年7月～1933年4月）以外は、上海だけでなく東京、大阪でも一般へ向けて販売されている。

なお、『東亜同文書院創立三十週年記念論文集』（1930〔昭和5〕年5月）は、『支那研究』第11巻第2号通巻第22号と同一のものである。

---

## 東亜同文書院支那研究部パンフレット

第1号～第9号、ほか2号（第1～6号  
まで現存）

上海：東亜同文書院支那研究部

1921（大正10）年10月～1927（昭和2）年6月

1918（大正7）年10月、東亜同文書院は中国を対象とした研究機関支那研究部を学内に開設した。同部は学術雑誌『支那研究』によって部員の研究結果を発表していたが、これとは別に「部員及学生の調査研究発表機関として随時必要に応じて『パンフレット』を発行しつつあり」（『滬友』第22号、1923年12月、15～16頁）というように、本誌が不定期に発行された。

現存を確認しているのは、国立国会図書館が所蔵する第2号～第6号であるが、本データベースでは、『滬友』、『支那研究』誌上で発行したことが伝えられている第1号、第7号～第9号及び号数不明な2号分についても論題名、著者名を記録した。

---

## 華語月刊

第1号～第119号

上海：東亜同文書院支那研究部華語研究会

1928（昭和3）年7月～1943（昭和18）年11月

東亜同文書院華語研究会発行中国語専門誌。

華語研究会は、東亜同文書院の中国語教員を中心メンバーとし、同校の研究部門支那研究部の中国語専門部署として設立された。

学校休暇期間中の8～9月をのぞき、概ね毎月1回発行され、上海だけでなく日本国内でも販売された。

中国語についての研究論文はもちろん、東亜同文書院の中国語の試験問題・模範解答を掲載するなど中国語学習の参考書としての内容をもつ。

なお、愛知大学図書館ならびに東亜同文書院大学記念センターが所蔵するのは第11号～第119号までである。第1号～第10号については、神戸大学図書館所蔵本を用いた。

---

## 国際

第1巻第1～2号、第2巻第1号、第3巻第1～4号、  
第4巻第1～2号、第5巻第1～2号、第6巻第1～2号、  
第7巻第2号  
上海：日本国際協会東亜同文書院学生支部  
1938（昭和13年）6月

日本国際協会東亜同文書院学生支部機関誌。

国際連盟を中心とした国際協調を民間から支えようとする平和運動団体日本国際連盟協会が、日本の国際連盟脱退により改称したものが日本国際協会である。その学生支部が東亜同文書院内で結成されており、1938（昭和13）年当時、東亜同文書院々長大内暢三を含む顧問6名、内山書店の内山完造や『新申報』論説委員日高清磨嵯（第25期生）など上海在留邦人や東亜同文書院教職員が名を連ねる賛助員36名、学生255名、計297名が参加していた（「部員名簿」（本誌第6巻第1号、127～128頁））。

同支部は、講演会の開催（「講演部と合同にて、維新政府より陳羣氏を文治堂にお迎へする。六月十八日。」（本誌第6号第1号、129頁））、日本国際協会夏期大学（「七月中旬開催の国際協会夏期大学に委員三名出席の予定」（本誌第6号第1号、129頁）とあるが詳細不明）への参加といった活動とともに本誌を発行した。学生による中国の社会、経済についての論文や英語論文の翻訳のほかに、東亜同文書院教員による論文も掲載されており、たんなる学生活動をこえた全学的な規模のものとなっている。

愛知大学霞山文庫が所蔵するのは第6巻第1号のみである。他号については、亜細亜大学図書館植田文庫所蔵本を用いた。

---

## 第二江南学誌

第5号、第7号  
上海：東亜同文書院学芸部  
1932（昭和7）年12月～1933（昭和8）年6月

東亜同文書院学芸部機関誌。

学芸部は、東亜同文書院の学生サークルのひとつである。滬友同窓会々報『滬友』第 21 号（1923〔大正 12〕年 3 月）編輯後記には、学芸部が雑誌を年 3 回発行することが告知されており、大正末年より機関誌が刊行されていたようである。また、本誌に先行して年 2 回発行の機関誌『江南』があり、満鉄社歌の作詞者で後に「満洲国」の文芸界で翻訳家として活躍する大内隆雄（本名山口慎一、第 25 期生）が在籍していた時期には、部員が田漢、郁達夫など中国の文化人と交流をもつこともあった。

1930（昭和 5）年、左翼系の部員を中心に政治色の強い新聞形式の『江南学誌』（1933 年創刊の冊子体のものは別個のもの）を出す、同年末の第 1 次学生検挙事件（反戦ビラ配布事件）によって部員が検挙されたため中断した。これを 1931（昭和 6）年に復刊したのが本誌である。

1931（昭和 7）年より、文芸同好会同人の作品も掲載するようになり、誌面には政治的なもののほかに文芸的なものもならんだ。

---

## 江南学誌

第 10 号～第 18 号、第 20 号、第 26 号

上海：東亜同文書院学芸部

1934（昭和 9）年 6 月～1940（昭和 15）年 3 月

東亜同文書院学芸部機関誌。

本誌は、『第二江南学誌』の後継誌として 1933（昭和 8）年に発行がはじめられた。誌面、内容は前身誌を踏襲したものとなっている。

---

## 霞山会館講演

第 1 輯～第 7 輯、第 9 輯～第 30 輯、第 32 輯～第 43 輯

東京：霞山会館

?～1937（昭和 12）年 2 月

霞山会館は、1928（昭和 3）年、東亜同文会の本部として建設されたものである。ここでは、東亜同文書院の入学式などが行われたほか、中国問題だけでなく国際事情について、新渡戸稲造、鶴見祐輔、郁達夫など各界の著名人を招いた講演会が東亜同文会によって開催された。この講演記録を冊子にまとめたものが本誌である。

非売品であると印字する号があることから、東亜同文会などの関係者へのみ配付されたものとおもわれる。

---

## 滬友学報

第1号～第5号、第7号～第16号  
上海：東亜同文書院（大学）滬友同窓会  
1940（昭和15）2月～1943（昭和18）年5月

滬友同窓会々報。

東亜同文書院の同窓会である滬友同窓会の会報『滬友』は、ながらく中断されていたが、東亜同文書院の大学昇格を契機に再開され、概ね3カ月毎に本誌が発行された。

誌面は、東亜同文書院学内記事と同窓会関係記事の二つにわけられ配列されている。

第16号（1943年）より後のものは未見。

---

## 崑崙

（冊子体）第1巻第1号～第2号、（新聞形式）第5号  
上海：東亜同文書院図書館  
1940（昭和15）年3月～1942（昭和17）年6月

東亜同文書院図書館報。

現存する3号分のうち、第1巻第1号、同2号は100頁前後の冊子体であるが、第5号は新聞形式の簡便なものとなっている。

---

## 東亜研究

第23巻第3号通巻第63号～第25巻第3号通巻第70号  
上海：東亜同文書院大学東亜研究部  
1942（昭和17）年7月～1944（昭和19）年10月

東亜同文書院大学東亜研究部発行学術雑誌。

東亜同文書院の大学昇格にともない、同校の研究機関支那研究部は東亜研究部と改称さ



れ、その刊行物『支那研究』も巻号数を引き継いだまま『東亜研究』と改められた。

---

## 東亜同文書院大学学術研究年報

第1輯～？

東京：日本評論社

1944（昭和19）年2月～？

東亜同文書院大学発行学術雑誌。

本誌について、発行当時の東亜同文書院大学々長矢田七太郎は、次のように述べている。

我々は古くから東亜の研究、殊に支那研究に最も力を注いで来たのであり、この方面に於ても特に学界に貢献し得たるものと私かに自負して居るものであります。最近の情勢の進展の結果、本学の研究対象も本来の面目を發揮して広く東亜の諸問題を研究することとなつたのであります。これ先年「支那研究」を「東亜研究」と改題したる所以のものであります。かかる現地に立脚した特種研究と共に、他面、大学として一般学理研究の発表機関を持ちたいと希ひましたることは数年来のことでありました（本誌、1頁）

つまり、専門学校から大学に昇格したということ为背景として、これまで専ら中国、アジアのみを対象としてきた学校としての研究活動をより広範な領域に拡大していこうというのが、本誌発行の意図であった。

---

\*引用に際しては、旧字体を新字体に改めた。また、文中の亀甲括弧〔…〕内は筆者による。